





『山本慈昭 望郷の鐘―満蒙開拓団の落日―』という長い題名の映画を製作監督、完成させた山田火砂子と申します。1月生まれで83才になりました。思えば長く生きてきた元気一杯の女性です。今年には戦後70年。平和をいつまでも願ひ、満蒙開拓団の悲惨を描きました。

一昨年、三浦綾子作の『母』（小林多喜二の母）の映画化をするつもりで支度をしておりました所、知人の和田登さんから、『望郷の鐘』という児童書が送られて来まして、読んでびっくりしました。昭和20年の5月1日に満州に行く、「えっ…」あと3ヶ月余りで日本は戦争に負けるのに、ひよつとしたら印刷ミスではないかと思ひ電話をしました。その時に興味を持ち、こちらの作品を先に映画化しようと思ひました。或る日、新潟の作家の方から、8月4日に東京大空襲で命が助かった方が40家族くらい渡満したとの話も聞き、2度びっくり。それから満蒙開拓団のことを調べていくうちに、「国家が総力を挙げて作りあげる大きな嘘は、いつの時代でも見破ることは容易ではない」満州に行けば空襲も無く食料もたくさんある平和の国『満州』6万坪の土地も貰える、日本国家の宣伝に乗せられて……。

満州国とは、中国の東北地区に昭和7年に昭和20年戦争に負ける日迄、満州国と言う国を勝手につくり、この事が米英仏その他の国々の反感を買い、第2次世界大戦に日本が突入していく発端になったのでは？―この事実をどうして教科書で教えないのか？それならば、私達、数少なくなつた老人が、第2次世界大戦の事を語らなければと思ひ、「中国残留孤児の父」と言われた山本慈昭さんの話を通して満州の話を描くことにしました。

戦争に負けることは、弱者だけが酷い状況になる。戦争とは悲惨なことです。二度と戦争をしない、平和をいつまでもと願ひ、この映画を作りました。どうか皆様のご支援を頂けましたら有難く感謝です。よろしくお願ひ致します。

映画『望郷の鐘』

監督・山田火砂子

### 「望郷の鐘」あらすじ

1945年。3月の東京大空襲で壊滅的な状況になつても政府は国民に真実を知らせず、命ながら生き残つた被災者をも開拓疎開の名のもとに、満州に送り込んでいました。

信州の伊那谷の貧しい3村からも満蒙開拓団として日本を発つ一団がありました。阿智郷開拓団です。寺の住職で国民学校の教師でもある山本慈昭は、村の有力者からの懇願で、妻と幼い二人の子どもと満州に向かいます。現地について間もなくソ連が参戦。慈昭はシベリアへ送られ、2年間の重労働ののち帰国しますが、妻子は教え子と共に死んだと聞かされます。しかし子どもの一人が生きているという情報があり、これを機に「残留孤児さがし」が始まるのでした……。



## 「望郷の鐘」上映会

◆平成27年 **9月12日(土)** 茨城県立県民文化センター小ホール

◆上映時間/①午前の部 **10時30分～** ②午後の部 **2時30分～**

◆入場料/前売 **¥1,000** (当日¥1,300)

※全席自由席

◆前売券発売所/県民文化センターチケット取扱所

■主催/茨城県日中友好協会・水戸市日中友好協会・茨城県日中不再戦之碑保存顕彰会

TEL029(224)1169 水戸市大町3-4-36

■後援/茨城県、茨城県教育委員会、水戸市、水戸市教育委員会、連合茨城、茨城新聞